

<前回>オリエンテーション

1. 近代の思想状況と自然神学

- 1-1 : 自然神学の起源と展開 4/16
- 1-2 : 啓蒙主義的知と近代神学 4/23
- 1-3 : 現代神学と科学・技術 4/23
- 1-4 : ティリッヒ 4/30
- 1-5 : モルトマン 5/7

2. 形而上学批判と形而上学再構築

- 2-1 : ハイデッガー・解釈学 6/4, 11
- 2-2 : ホワイトヘッド・プロセス神学 6/25, 7/2

3. 自然神学の新しい動向

- 3-1 : クレイトン 7/9
- 3-2 : マクグラス 7/16
- 3-3 : 意味論・言語論 7/23

Exkurs

人文学の新しい可能性——キリスト教の視点より 5/14, 21

科学技術の神学の可能性——現代キリスト教思想の文脈より 5/21, 28

導入：自然神学の歴史的展開の構図

A. 「宗教と科学」関係史と自然神学

未分化／調和		／分離・分裂／対立／無関係／新たな関係へ			
分化／区別（専門化）／緊張					
古代	中世	近代初頭	啓蒙・19世紀	20世紀	
創造論	二つの書物				
知恵	自然神学	神の存在証明	天文学	生命	心・脳
				進化	遺伝子
					原子力

B. 現代の問題状況から

金承哲著『神と遺伝子——遺伝子工学時代におけるキリスト教』（教文館、2009年）

1. 近代の思想状況と自然神学1-1 : 自然神学の起源と展開

1. Natural Theology (*The Oxford Dictionary of the Christian Church*, 3rd. edition, p.1132r.)

The body of knowledge about God which may be obtained by human reason alone without the aid of Revelation and hence to be contrasted with 'Revealed Theology'. The distinction was worked out in the Middle Ages at great length, and is based on such passages as Rom. I:18ff., acc. to which man is capable of arriving at certain religious truths by applying his natural powers of discursive thought. In a definition of the First Vatican Council (De fid. cath., cap.a, can.2) the possibility of this knowledge is explained by the dependence of the creature upon God. The chief objects of Natural Theology are God in so far as He is known through His

works, the human soul, its freedom and immortality, and Natural Law. Hence, strictly speaking, Natural Theology is part of philosophy and treated as such in the systems of Scholasticism. Reformation theology generally rejected the competence of fallen human reason to engage in Natural Theology; and in modern times this incompetence has been reasserted with emphasis by K. Barth and the Dialectical School. Modern theologians sympathetic towards the ideals of Natural Theology often present their views under the heading of 'Philosophy of Religion'.

2. Natürliche Theologie (Walter Sparr), in: TRE 24. Walter de Gruyter. 1994, S.85-98.

- Einleitung 1. Die Umformung der vorchristlichen natürlichen Theologie
2. Wissenschaftliche natürliche Theologie und Naturfrömmigkeit seit dem Mittelalter
3. Die philosophische Emazipation der natürliche Theologie in der Neuzeit
4. Die theologische Kritik der natürlichen Theologie
5. Fundamentaltheologische Revisionen (Quellen/ Literatur S.95)

Gehalt und Gebrauch des Unterscheidungsbegriffes "natürliche Theologie" bestimmten sich stets im Zusammenhang mit seinen Seiten- und Gegenbegriffen ("vernünftige" bzw. "übernatürliche", "offenbarte" → Theologie) sowie im Blick auf den ihn spezifizierenden Kontext: In den Wechselbeziehung der theologischen Annahme einer "natürlichen Gotteserkenntnis" und der philosophischen Reden von → "Gott" und "natürlicher Theologie" oder → "natürlicher Religion" haben sich Bedeutung und Zuordnung der Begriffe → "Natur", → "Vernunft", → "Offenbarung" von Anfang an, in neuerer Zeit zweifellos tiefgreifend, verändert.

Die altkirchliche Theologie hat den Begriff vorgefunden. Seit der mittleren → Stoa (Panaitios) bezeichnet *theologia naturalis* die Gotteslehre der Philosophen, im Unterschied zur "mystische Theologie" der Dichter und zur "zivilen Theologie" der Staatskulte.

3. 聖書的前提

- ・創造論／知恵思想
- ・パウロ

「8:2 主よ、わたしたちの主よ／あなたの御名は、いかに力強く／全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます

3 幼子、乳飲み子の口によって。あなたは刃向かう者に向かって砦を築き／報復する敵を絶ち滅ぼされます。

4 あなたの天を、あなたの指の業を／わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。

5 そのあなたが御心に留めてくださるとは／人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう／あなたが顧みてくださるとは。

6 神に僅かに劣るものとして人を造り／なお、栄光と威光を冠としていただかせ 7 御手によって造られたものをすべて治めるように／その足もとに置かれました。

8 羊も牛も、野の獣も 9 空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。

10 主よ、わたしたちの主よ／あなたの御名は、いかに力強く／全地に満ちていることでしょう。」(詩編)

4. Rom 1:19-20

διότι τὸ γνωστὸν τοῦ θεοῦ φανερόν ἐστιν ἐν αὐτοῖς ὁ θεὸς γὰρ αὐτοῖς ἐφανερώσεν.

τὰ γὰρ ἀόρατα αὐτοῦ ἀπὸ κτίσεως κόσμου τοῖς ποιήμασιν νοούμενα καθοράται, ἢ τε αἰδίου αὐτοῦ δύνάμις καὶ θειότης, εἰς τὸ εἶναι αὐτοὺς ἀναπολογήτους,

(ローマの信徒への手紙)

1:18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。20 世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。21 なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。22 自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、23 滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。)

5. 古代ギリシャ哲学→キリスト教・教父

・Ingolf U. Dalferth, *Theologu and Philosophy*, Wipf and Srock Publishers, 2001.

<プラトンの自然神学> (『法律』第10巻、『プラトン全集 13』岩波書店)

「法律の命ずるとおりに神々の存在を信ずる者で、自らすすんで不敬なことを行なったり、また不法な言葉を口にしたりした者は、かつて誰ひとりいないのである。もし誰かそういうことをする者がいるとすれば、それは彼が、次に三つの誤った考え方のうちそれか一つにおちいつているからである」(885B)

「神々を存在しないと考えていないか」「神々は存在するけれども、人間のことを気づかなくてはくれないと考えているか」「神々は犠牲や祈願によって心を動かされるから、機嫌をとしやすいものであると考えているか」

「自分自身で動かす動は、すべての運動変化の始原として、静止しているもののなかにおいて最初に生じてくるものであり、運動変化しているもののなかでは第一番目のものであるから、その動こそが必然的に、あらゆる運動変化のなかでは最も古くて最も強力なものである、ということになるでしょう」(895B)

「「魂」という名前をもつもの、その定義」「自分で自分を動かすことのできる動」(895D)、「魂がすべてのものにとって、あらゆる変化や運動の原因のであること」(896B)

「動いているものにはすべて魂が宿っていて、これを統轄しているのだとすると、魂は天をも統轄していると言わざるをえないではありませんか」(896E)、「もし天と天のなか存在するすべてのものとの軌道や運行全体が「知性」の運動や回転や計算と同様な性質のものであって、それに類似した仕かたで行なわれているのであれば、その場合には明らか

に、最善の魂が宇宙全体を配慮していて、そしていま言われたような[知性が運動するのと同様な]軌道にそって、宇宙全体を導いているのだと言わなければなりません」(897C)
「それらはあらゆる徳をそなえた善い魂なのであるから、これらの魂は神であると、わたしたちは言うことになるでしょう」(899B)

「神々について君のような考え方をしている者は、君一人だけではないし、また君の友人たちが最初で初めの人というわけでもない。いな、そのような病気にとりつかれている者は、多い少ないはあれ、いつの時代にも現われてくるものだ」(887B)

「その連中がまず最初に主張していることは、神々は人為(技術)によって、つまり自然によってではなく、一種の法律(慣習)によって存在しているのだということです」(889E)

<ロゴス論>

・ストア哲学、アレクサンドリアのフィロン

平石善司『フィロン研究』創文社、1991年。

「第一部 フィロンのロゴス論」

フィロン『世界の創造』(町田啓、田子多津子訳) 教文館、2007年。

・アウグスティヌス『神の国』第4巻第27章

「もっとも学識すぐれた祭司長スカエウオラは三種の神々を区別してと、書に書かれているが、その第一は詩人によるものであり、第二は哲学者によるものであり、第三は国家の指導者によるものである。それによれば、第一のものは、神々にふさわしくない多くのつくりごとを含んでいるからとるにたらず、第二のものは、余分なものや、それを知ることが人民に有害であるものをももっているから国家にはあわない。」(服部英次郎訳・岩波文庫『神の国(一)』329頁)

矢内原忠雄『アウグスティヌス 神の国』(土曜学校講義2) みすず書房、141頁。

・David C. Lindberg, "The Medieval Churches Encounters the Classical Tradition: Saint Augustine, Roger Bacon, and the Handmaiden Metaphor," in: David C. Lindberg and Ronald L. Numbers, *When Science & Christianity Meet*, The University of Chicago Press, 2003.

The church father who has come to symbolize this fear was Tertullian, a highly educated critic of the classical tradition, who converted to Christianity after completion of this own superb classical education. Tertullian wrote extensively against heresy, attacking the classical tradition as its incubator. (11)

The church father who most influentially defined the proper attitude of medieval Christians toward pagan learning was Augustine. (12)

6. 波多野精一『西洋宗教思想史(希臘の巻)』(『波多野精一全集 第三巻』)の目次序

希臘の巻

第一章 ホメロス

第二章 ヘシオドス

第三章 抒情詩人

第四章 オルフィック教徒

第五章 ミレトス学徒

第六章 クセノファネス

第七章 ピュタゴラス及びピュタゴラスの徒

第八章 ヘラクレイトス

第九章 パルメニデスよりアナクサゴラスまで

第十章 アテナイの文化

第十一章 悲劇詩人

第十二章 ソフィスト

「第八章 ヘラクレイトス Herskleitos」

古代ギリシア哲学史において必ず取り上げられる思想家の一人である、ヘラクレイトスが今回の対象であり、波多野はかなりの分量をさいて、ヘラクレイトスを論じている。波多野はヘラクレイトスの思想を重視し、踏み込んだ解釈を行っている。

a. 時代と人物

クセノファネス、ピュタゴラスよりは幾分後の人。紀元前第五世紀初頭。「譬喩に富んだ謎めいた連絡に乏しい短句を連ねたもの」、「民主主義を心から嫌った」、「多数派を軽蔑したに止まらなかった」(83)

「紀元前第六世紀の前後は、政治的にも釈迦的にも宗教的にも最も同様の激しかった時、偉大なる個人たちは相次いでこの時に出現した」、「先覚者指導者としてのわが使命と責任」、クセノファネス、ピュタゴラス、ピンダロス、アイスキュロス。「靈感に動かされたる、自覚の強烈なる、個性の鮮やかなる、代表的人物」、「凡ゆる人間を眼下に見下すが如き態度」、「前人の未だ思い到らなかった新しい真理の発見を自覚自信した」(84)、「独創を誇ったが」「イオニアの新興の学問より学び」「ミレトス派に最も接近した点」

「三つの部分又は方面」、「原的物質の説」「万物流動の説」「ロゴスの説」(85)

(中心はロゴス説。これがこの章のポイント)

b. 思想

1) 万物の生成変化と永遠なる物質

実体としての「火」、絶えず生成変化する万物の本質に適する。火の永遠性(85)

「万物と人との間」の「絶え間なき交換」(86)

火から万物へ、万物は火に帰る。第一・下り道、第二・上り道

ミレトス派の根本思想と一致する

「永遠の活くる火」「万物は絶えず運動し絶えず変化する」

「一切は流れる」「という句が彼自身より出たかは疑問であるが」、プラトン、アリストテレスの説(86)

「万物流転の説」(86)が、「ヘラクレイトスによって明瞭かつ力強く説かれたことを、彼の功績と認めるに躊躇しない」、しかし、「これは特に彼において斬新と認むべきものに

は属しなかった」(87)

↓

2) 中心思想としてのロゴス説

「ロゴスは永遠に存在す」「一切はこのロゴスに従って生ず」(87)

「ロゴス」「第一に、万物を支配する永遠の法則である」「普遍的であり又必然的である」(88)、「万物に共通なるもの」、「語」、「人間の法」を養う「神の法」、運命、必然。

絶えず動いて止まぬ万物に対して「動かぬもの変わらぬもの」「普遍妥当的真理」、「かかる法則こそ「ロゴス」」(89)

・「万物が互いに相反し互いに相争うのを見た」「争闘」、「世界の存在は差別を要求し、差別は、互いに相容れぬものどもの関係として、反対を意味する」。

もしこのことがなかったならば、「一切に無差別の一者に没入し、差別も流動も無きに至るであろう」。「火と他の諸物質」と両者を結び付ける「上り道と下り道」の並存或いは対立によって、「世界は寂滅を免れ居る」、争闘・戦いは「万物の父なり、万物の王なり」「万物は争いによって生ず」(90)

↓

「争いこそ正義なれ」、「物界のみならず人生においてかかる反対かかる戦争の支配を見た」

↓

しかし、「世界の存在と生命とを可能」にする以上は、「それらは根本において一でなければならぬ」「上り道と下り道とは畢竟同一」「同一者の別名」「始と終との一致する円周」(91)、「隠れたる調和」「一切は一なる」「を承認する者こそ知者なれ」

(知者！ 知恵思想)

・「一元論はすでにミレトスの思想家たちの主張した所」、しかし「多と差別とを否定するは」「世界を無とするに等しい」、「具体的の生に対する興味深く直観と想像との力強かったヘラクレイトスの特になしえなかった所」(92)、「徹頭徹尾反対、争闘と感知しながら、しかも真なるものとして肯定した」、「動は静を多は一を要求し、前者は後者においてはじめて己の存立の制約と根拠とを発見するを見た」、「争闘は正義」。

↓

このことはいかにして可能か。

「論理的困難なく、思惟の法則を愚弄する恐れなく、考え得るか」

(つまり、矛盾律を犯すことなく)

「靈感にさそわれたる預言者の感激と無邪気をもって」「天才にふさわしき徹底したる洞察をもって」「感得するがままの真理を真理として」宣言した(93)。

・アレクサンドリアのフィロン、間接の証人(93)

・世界法則としてのロゴスにとどまらず、「ロゴスを火と同一視した」「火こそロゴス」、「ミレトス派の自然哲学の惰力」(94)

元来、「法則又は真理を意味するロゴスは」「精神的實在」(94)、「一切を支配し指揮するロゴスを理性」「一にして唯一なる知恵」などと呼んだ、「永遠なる世界的の知恵を認識する一事にこそ人間の知恵は存する」(95)

3) 宗教思想との関わり

- ・ロゴスを「神」と呼んだ(95)

「永遠の法則」「隠れたる調和」において最も深き本質を実現する「叡智」、「かくの如き神は自体において経験を超越するものでなければならぬ」(95)

神の超越性

「神においては一切は美しく、又正し・ただ人は或ものを正しとなし他を正しからずとなすのみ」、「世界におけるすべての差別及び反対」「を通じて、ついに、善悪のかなたなる絶対的価値、超善的善者、あらゆる存在あらゆる価値の根源なる至高至善なる理想的実在、の確信に登り着いた」(96)

- ・ヘラクレイトスの人世観は世界観神観と密接に関連している。

知恵は人間においても最高の徳、「哲学者を意味する *philosophos* (愛知者) の語はヘラクレイトスがはじめて用いたものらしい」、普遍妥当的なものに服従することが、知を愛する者の義務。

↓

「共通なるものを認識する知恵は決して多数に通ずる所謂常識ではあり得ない」、「多数の民衆は」「真に共通なもの」「真に普遍妥当的なものを知らず」「それに従わず、却って各独自の識見あるかの如く振る舞う」(97)

↓

「世論に立脚する民主政治に対して心からの憎悪を傾けた貴族主義」「強烈なる自信」「厭世的気分」も、「ヘラクレイトスの超越的傾向よりはじめて、しかも全く、了解し得られる」、「彼の哲学は彼にとって世界の隠れたる秘義の啓示を意味したのである」(98)

(波多野自身は民主主義についていかなる見解を有していたのであろうか。ヘラクレイトスへの共感は?)

c. まとめ

- ・自然哲学者に数えられる。しかし中心はロゴスの観念。永遠の真理こそがヘラクレイトスの哲学の精神、生命(98)

「包括的普遍的体系としての哲学の理想は彼においてはじめて曙光を示したというべきであらう」(99)

- ・宗教思想の歴史より。

神を理想的精神的実在と認めた、超越性と内在性との両思想要素を結合させる努力
汎神論の特色、一者即一切者の思想

現実の肯定

↓

プラトン及びプロティノスの思念なる思想の萌芽
一者の超越性(99)

- ・ロゴス説の影響

プラトンのイデア論

ストア派、ヘラクレイトスの再生

↓

フィロンを経て、キリスト教神学へ、「この宗教と希臘思想との結合に際する最も強力なる楔を提供した」(100)

7. キリスト教古代・教父

Jaroslav Pelikan, *Christianity and Classical Culture. The Metamorphosis of Natural Theology in the Christian Encounter with Hellenism*, Yale University Press 1993
, *What Has Athens to Do with Jerusalem? Timaeus and Genesis in Counterpoint*, The University of Michigan Press 1997

キリスト教思想の形成の二つの動機・文脈

- ・キリスト教の弁証
- ・キリスト教内の論争：正統と異端

8. 中世の自然神学→近代へ

二つの書物と知の体系化

<参考文献>

1. 芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。
2. A.E. マクグラス『科学と宗教』教文館、2003年。
『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の新展開』教文館、2011年。
3. 芦名定道「自然神学」(『宗教学事典』丸善出版、2010年10月)。
4. A・S・マクグレイド編『中世の哲学 ケンブリッジ・コンパニオン』
京都大学学術出版会、2012年。
5. E・グラント『中世における科学の基礎づけ——その宗教的、制度的、知的背景』
知泉書館、2007年。
6. エティエンヌ・ジルソン、フィロテウス・ベナー
『アウグスティヌスとトマス・アキナス』みすず書房、1981年。